日本人とユダヤ人

−その自我構造の類似性と相違性−

唐　沢　　治

帝京平成大学ヒューマンケア学部鍼灸学科

On the Similarities and Differences of the Psychopathological Structures of Japanese and Jew

KARASAWA Osamu

Department of Acupuncture and Moxibustation, Faculty of Health Care,
Teikyo Heisei University

Abstract

In this paper, we discussed the differences and similarities of the psychopathological ego structure of Japanese and Jew. Both have been suffering from psychological wounds caused by specific some original traumatic events, which they have suppressed into the subconscious so far. Then their egos have been split due to the self-deception and constantly experiencing inner conflict. This has created the compulsive obsessive tendency in both. Undergoing repeated traumatic experiences, they have strengthen, especially in Jew, the paranoid tendency, which generates friction with neighboring countries. One of the Major differences is while Jews is single-polarity, Japanese is bi-polarity. Jew, therefore, is increasingly developing the paranoid tendency and has been isolated, which makes the Middle East situation more complicated and difficult to solve. Japanese has been experiencing fluctuation repeatedly and vigorously from left-wing to right-wing and vice versa, which will develop the state of exhaustion, apathy and autism similar to negative symptoms of schizophrenia. Its signs are appearing as decreasing population and depletion of life drive force among young people.

Keywords:日本人とユダヤ人、アイデンティティ、自我構造、自己欺瞞、強迫性、パラノイド傾向、自我分裂、単極性と双極性

１．緒言

最近のイラクにおける ISIS などの侵攻やシリア情勢、さらにイランの核開発など、中東情勢は混迷を深め、世界の火薬庫と言われる状況がそのままに現出している。その問題の中核的問題として存在するのがイスラエルであることは明白である。同国が1967 年第三次中東戦争で統一し、自らの首都と宣言するエルサレム（平和の町）は、国連決議によって認知されていない引き裂かれたままの町である。そもそもパレスチナ暫定国家などはイスラエルをユダヤ人国家として認知することを頑なに拒んでいる。AD70 年にローマのタイタスにより滅ぼされたイスラエルは、その後 2000 年に渡るディアスポラの苦難や、中世のゲットー生活、さらにヒトラーによる迫害を経て、1948 年、ついに約束の地にイスラエル国家を再建した。そのために当時そこに居住していたアラブ人などが居住地を失って難民と化し、イスラエルとの繰り返す紛争を経て今日に至る。最近の傾向は、イスラエルは世界の和平にとってのガンでありテロ国家であるとさえ糾弾する者があるほどに、感情的に反イスラエルに傾いている。ヨーロッパでは反ユダヤ主義も広まりつつある。我が国の、特に左傾のマスコミでもイスラエルが悪者扱いされる傾向が強い。しかしながらマルクス、フロイト、アインシュタインといった現代思想の各分野における基礎を築いた人々もユダヤ人であり、ノーベル賞受賞者も圧倒的にユダヤ人の比率が高い。つまり彼らの貢献なしに現代社会は存立し得ないと言える。

かくのごとく、「ユダヤ人」という言葉の響きには独得のものがある。しかし聖書になじみのない八百万の神の民である日本人にとっては、絶対的一神教の地において起きている事態を理解することはきわめて困難である。その理由のひとつは、かの地においては「1000 年は 1 日のごとし」と、時間感覚が日本人のそれとはまったく異なることにある。つまりユダヤ人やパレスチナ人にとって、いまだに聖書時代の因縁がそのまま継続しているのである。そもそもユダヤ人とアラブ人はアブラハムの異母兄弟であり、骨肉の争いゆえ、その対立と憎悪は理性を排除して深いものとなる。

ひるがえって我が国を見ると、明治以降、聖書信仰者の間においてスコットランド人ノーマン・マクラウド[1)]が唱え出した、いわゆる「日ユ同祖論」なるものがある。その後日本人側からもユダヤ人側からも提出されており、今日でも一部の人々の間では根強く主張されている論である。ただし、最近の DNA 鑑定によると、日本人とユダヤ人の遺伝子にはつながりは認められないとされている一方[2)]、両者の YAP 遺伝子の特異的類似性も指摘されている[3)]。このような生物的側面は置いても、精神病理的には日本人とユダヤ人においてはきわめて類似性を感知するものである。これは WW2 の際の杉原千畝氏とユダヤ人との関わりに見られる対ユダヤ姿勢のわが国の特異性、イザヤ・ベンダサン[4)]による両者の類似性の指摘、ユダヤ教の有名なラビ・M・トケイヤー[5)]も、日本に来ると故郷に帰ったような懐かしさと親近感を覚える、と証言していることにも見られる。ちなみにイスラエルの離散ユダヤ人を発見するイスラエル調査機関アミシャブも最近日本を訪れて調査をし

ている。

現在、我が国は中国や韓国との関係が悪化し、憲法改正を射程に入れた安倍政権も右傾化が激しいと海外のマスコミからも警戒されている。左系の代表であるかつての社会正義の旗手朝日新聞が激しいバッシングを受けるように右傾化する中で、映画『永遠の O』に見られるような日本人の美徳感覚を再発見しつつ、日本人のアイデンティティ探しが行われている。本論文においては、時に右、時に左と振り子のように揺れ動く、一神教とはほぼ無縁に見える日本人の霊的精神的構造[1]、すなわち「甘えの構造」、「アニミズム」、「天皇制」を有する我が国も、実はその深層心理レベルにおいてはユダヤ人と同じ病理を有していることを論じると同時に、両者の相違についても指摘したい。本稿により現在の中東と我が国の混迷状況を少しでも理解する手がかりを提示することを期待するものである。

２．ユダヤ人のアイデンティティと精神病理

2.1. ユダヤ人の定義

まずユダヤ人の定義であるが、たとえば現在のイスラエル建国の父、デイビット・ベングリオンは、「我々は三千年間定義なしでユダヤ人として生きてきたし、今後もまた然りである・・・ユダヤ人は宗教共同体とか民族といった定義もあろうが、ユダヤ人という意識だけで十分である」としている。つまりその人の信条や行いはユダヤ人の定義には無関係であって、「ユダヤ人である」という意識をもつことがユダヤ人のアイデンティティであると言う訳である。言い換えると自分がユダヤ的伝統の過去と結びついている意識を共有することに他ならない。ポイントは神の選民であるという中核的意識である。ところがイスラエル帰還法に定められた法的定義は、「ユダヤ人とはユダヤ人の母親から生まれた人、またはユダヤ教に改宗を認められた人」である。ユダヤ法では父親がユダヤ人でも母親が非ユダヤ人の場合、子供はユダヤ人ではないと定めている。かくのごとく母親がユダヤ人なら、確実にユダヤ人の血は受け継がれていくわけである。すなわち母系的定義と言える。

そこで、イスラエル人（国民）であってもユダヤ人ではないという事態が生じ、わけの分からないことになる。歴史的には A.D.70 年にローマのタイタスによるエルサレム攻撃の後、マサダの要塞の攻防などを経て、いわゆるユダヤ人は国を失い、放浪の民となるわけであるが、これをディアスポラと言う。約 1900 年間国がなく、様々の差別や迫害にも関わらず、彼らはユダヤ人として生き延びて、フロイト、アインシュタイン、マルクスなどの天才を輩出し、ついに 1948 年イスラエル国家の再建を果たし、現在も世界的な富と情報を網羅し、世界に多大な影響を与え、地政学的現象と時系列的歴史のクロックでもあるわけである。歴史の奇跡とも言われるまことに不思議な民である。

彼らは旧約聖書の民であるが、もともとユダヤ人という民族があったわけではない。

[1] 本論文で使用する「霊的」という単語は、「信仰的あるいは宗教的」の意味で理解しておいてよい。

全人類の罪の贖いのためにセム系のアブラハムなる人物を神は選ぶ。その子供に妾の子イシマエルと正妻の子イサクが生まれる。イサクの子としてヤコブ、その 4 人の妻たちから、12 人の子供ールベン、シメオン、レビ、ユダ、ゼブルン、イサカル、ダン、ガド、アシェル、ナフタリ、ヨセフ、ベニヤミンーが生まれる。ハリウッド映画『十戒』でも有名なモーセによる「出エジプト」の後、約束のカナンの地に定住し、土地の配分においてレビは祭司であるので割り当てがなく、代わりにヨセフの子マナセとエフライムを加えて 12 部族と数える。このうちユダとベニヤミンが後の分裂王国の南王国ユダを、残りが北王国イスラエルを構成し、北は BC721 年にアッシリアに滅ぼされ、その 10 部族はいずこかへ連行され歴史の舞台から消える（いわゆる「失われた十部族」）。南は BC586 年バビロンに捕囚として連行されるのであるが、この時に異教の地にあって自己のアイデンティティを担保するために排他的選民意識に基づいてタルムードを編纂し、旧約聖書に加えてそれに基づくユダヤ教と、後にイエスやパウロが対決する宗教的ユダヤ人としての意識的アイデンティティを確立する。この意味でユダヤ人とは、厳密に言えば、南王国の末裔とされるべきである。

2.2. 聖書的定義と現代的定義の解離

こうして見ると現代のユダヤ人の定義は母親系列の血統的定義によるユダヤ人と、宗教的定義によるユダヤ教に改宗したユダヤ人という二系列が存在する。一方、旧約聖書における神の約束は「アブラハムとその子孫」とに与えられたものであり（創世記 12 章）、ゆえに聖書的には「ユダヤ人＝アブラハムの子孫」と定義され、すなわち血統的な定義になり、それはセム系を意味する。ところが現代の定義では必ずしもアブラハムの血統的子孫であることは保証されないことになる。もちろん神は全能であるから、どこに 12 部族の末裔がいるかはご存知であるので、終わりの日にイスラエルの全家を集めることも可能である。

しかしここにすでにイスラエルという国家あるいはユダヤ人という共同体の内部に自己矛盾的というか、ある種の分裂要因があることを知ることができる。事実ユダヤ教原理主義の一派は、現在のイエスラエル国の成立すら聖書預言の成就とは認めていない。現代のイスラエルという国の内外の問題や葛藤は、このような目に見えない部分での彼らの自己矛盾あるいは分裂した集合的自我によることが推測できるのである。

また彼らは全人類に神の救いをもたらすために選ばれた民であり、その救い主の雛型である旧約聖書を委ねられた民でありながら、その実体である真のメシア（救い主）であるイエスを拒否してしまうと言う、自らの経綸上の霊的アイデンティティと完全に矛盾する行為をしてしまった。ここに彼らは霊的アイデンティティにおける分裂を抱え込むことになった。このような矛盾するものが同時に存在することをアンビヴァレンツな状態と言う。要するにユダヤ人は社会的・習俗的あり方においても自我の分裂があり、霊的存在としても自我が分裂しているのである。

2.3. 自我の分裂要因

精神分析の創始者フロイト自身もアシュ

ケナジ・ユダヤ人であり[2]、自分がユダヤ人であることに選民意識的優越感と社会的劣等感との間で分裂する自我を意識し[3]、その葛藤の中から人間精神のメカニズムを解明すべく、いわゆる精神分析の体系をうち立てた。彼の理論は旧約聖書の概念により啓発されたものであり、自身の内的自我分裂を合理化するために、自身の葛藤の中から生み出されたものと言える。彼の論考の『トーテムとタブー』(1913)においてユダヤ教の起源とその精神病理について分析している。もちろん霊的要因はまったく考慮されていないが、その中で明らかにされた精神病理のダイナミクスは興味深いものである。

自我が分裂するメカニズムとして、真実をうすうす知りつつも、それが自我の存在にとって脅威となる場合、その真実を抑圧し、それでも噴出してくるリビドー（情動エネルギー）を絶えず閉じ込めるための取り繕いをする結果、監視される自我と監視する自我に分裂すると説明される。この時超自我（いわゆる良心）が過敏にして不安定になる。例えばレイプなどの被害者は、自分の受けた被害について、その真実に自我が耐え得ない場合、その事実の存在自体を否定しようとしたり、あるいは自分がその時感じた屈辱感や恐怖感を無意識の中へと抑圧する。これを解離と称するが、心が凍る状態と言え、しばしば生きる実感を喪失したり、さらには離人神経症に陥る。しかしその感情エネルギーの塊は決して消滅することはなく、絶えず意識の中へと噴出しようとする。これを抑えるために取り繕いを続けるわけであるが、真実を受け入れて自己化できない間は、不思議なことにしばしば加害者と同種の人物に関わり、裏切られ・捨てられるという同じような悲劇を繰り返してしまう。これを強迫反復と言う。これは自分が虐待されたのは事実でないとする希望的仮想、あるいは自分は屈辱感を感じてはいないということを証明するために、同じような相手と同じような関係を作ってしまうためである。こうして何度も裏切られ、傷つくことが繰り返される。

2.4. 強迫傾向とパラノイド

ユダヤ人、特に保守的ユダヤ教徒はその律法戒律主義と細部にわたる儀式遵守で有名である。いわゆる安息日（金曜日の夕方から土曜日の夕方まで）にはホテルのエレベーターまで止まる。その息も詰まるような拘りの原因はどこにあるのだろうか。また彼らは歴史上いわれのない迫害を受け、厳しい試練をくぐってきたことは事実であるが、どうして彼らがそのような目に会うのだろうか。実はこの二つの論点は密接に絡み合っている。

まず歴史的事実として彼らがバビロンに

[2] 現在、ユダヤ人の系統としては、AD70年以降東ヨーロッパに離散したアシュケナジとスペインやアフリカに離散したスファラディ、中東に離散したミズラヒムに大別される。詳細は、ドナ・ローゼンタール、井上廣美訳：『イスラエル人とは何か-ユダヤ人を含み超える真実』、」徳間書店、2008

[3] 彼はもともと神経細胞の研究者であり、精神分析理論の構成においてもユダヤ教の信仰的側面を意識的に排除し、いわゆる科学的であることに頑なに拘っている。ここに、彼のユダヤ性との乖離を見ることができる。つまり彼自身の内部である種の自我の分裂が生じており、ユダヤ人ではあっても、ユダヤ教徒であることは許されないことであった。これはきわめて自己矛盾的なアイデンティティのあり方である。

捕囚された時代、自らのアイデンティティを担保するために旧約聖書から少なからず逸脱して先鋭化し、社会司法から生活規則まで拘束するタルムードを組織して、排他的にユダヤ教を発達、深化させた。この意味で、イエス時代のパリサイ人などは旧約聖書の価値観からは逸脱し、バビロンの影響を受けたバビロニア・タルムードに従っていたと推測される。その彼らは旧約聖書に予言されているメシア・イエスを拒絶した。彼らはイエスとの対決において彼の神的権威を認め、うすうす彼が本物であることを知っていたにも関わらず（何も気づいていない人は何らの反応もしない）、それを否定し、彼を殺し、その罪責感を抑圧した。この罪責感は絶えず彼らの意識上に上ってきて、彼らの良心を苦しめるが、この良心をなだめるためにある一定の行為を儀式として繰り返す。超自我が強固であるほどに儀式張る傾向が顕著となる。これが具体的にはユダヤ教の諸儀式になるわけであるが、これは彼らの良心の葛藤が大きいほど、他者からの隔離と閉鎖傾向を強め、細部にわたって執拗に繰り返される。このような状態は強迫性性格による強迫神経症傾向と言える。つまり彼らのユダヤ教的儀式や戒律などはすべて強迫性傾向の現れと見ることができる。この彼らの強迫傾向はひとつの大きな特徴である。これが彼らをして旧約聖書の写本を一点一格まで正確に保存し得たと言える。フロイトも犯した罪を自己防衛的に直視することを避け、抑圧することによる強迫傾向について指摘し、ユダヤ人の苦難の原因と一神教としてのキリスト教成立のメカニズムを説いた[6]。

次に、彼らが迫害を受ける原因としては、第一義的に彼らの排他的選民意識によるところが大である。人の精神の働きとして自分の内側にある意識や感情を相手に投影して、自分の内にある意識や感情を相手の内に見る心理機制があり、これを投影（投射）と呼ぶ。例えば憎悪などの感情を自分が持つことは超自我の検閲により良心の咎めを受ける場合、相手がその憎悪を持っているとして、自分の良心の呵責を回避しようとするわけである。かつてのアメリカとソ連の軍拡競争も、自分が核を持てば持つほど、相手も持つのではないかという妄想を膨らまして、地球を何百回も滅ぼせるほどの核で軍備増強したわけである。このような傾向をパラノイド傾向と呼ぶが、これは迫害する側の精神病理も同一である。つまり迫害者と被迫害者は共に同じ病理を有していることが多い。

かくして彼らの自我は良心の葛藤による分裂を抱えたまま、強迫傾向により増幅された排他的選民意識によって肥大する。しかしこれは内実を伴わない肥大であり、きわめて脆弱な状態にある。つまりひじょうに傷つきやすいのである。実際、これは筆者自身もイエスラルを訪ねた際、彼らと接触する中で、その内的な繊細さ、ナイーブさを感じ取ることができた。ある種、日本人と共通する感受性の鋭さを帯びている。こうして過敏さを増し、些細なことで傷つく傾向を帯び、その結果他者に対して防衛的姿勢を取るようになる。これと彼らの排他的選民意識が絡んで、他者を排除する傾向と閉鎖性を帯びるようになる。

以上の病理は選民意識によって肥大して内実のない脆弱な自我を守るための心理機制であるが、自我が肥大していればいるほ

ど、相手に投影する他者排除と攻撃性も強くなり、その結果自分が受ける被害も大きくなる。彼らが受けている迫害の原因は、肥大した尊大な自我と内実のない臆病な自我という内面の分裂（アンビヴァレンツ）にある。これがパラノイド傾向、あるいはアイデンティティを担保するための頑固な儀式あるいは頑なさとして現れる。そして前者は独裁者に、後者はユダヤ人にあてはまる。またヒトラー自身もアーリア民族のみが神に選ばれた民とする選民意識を持っていた。つまりヒトラーとユダヤ人は同じ病理を有しており、かつてのホロコーストの悲劇は互いに相手の中に自分の嫌悪する要因を見た結果なのである[4]。いずれにしろヒトラーは自分の中にある嫌悪する要因を、ユダヤ人に投影して彼らもろとも抹殺したかったわけである。かくして彼は強迫的にユダヤ人を粛清していったわけである。しばしば加害者と被害者は同種の性向を帯びていることが多い。そして被害者は絶対的に強い立場を得る。現代においてもニュルンベルグ裁判の結果に異議を唱えること自体が違法とされるなど、ユダヤ人は徹底的に善にして被害者であると同時に、パレスチナ問題で明らかなように時に残虐な加害者でもあるという二重性あるいは自己矛盾性を呈する。

2.5. トラウマの抑圧

かくしてユダヤ人は延々とトラウマを抱える。古くはアッシリア、バビロン、さらにローマによる殲滅から、中世の異端審問やゲットーにおける生活、さらに近代のヒトラーによるホロコーストまで、彼らの歴史はトラウマの歴史と言える。しかし彼らはあくまでも神の選民であり、神は自分たちをこのような目に会わせることはあり得ないとして、彼らにとっての来るべき「メシア」の到来を待ち望みつつ、閉鎖傾向と強迫傾向を強める。すなわち彼らはレイプなどの被害者と同様に、その真実から逃げるために自己欺瞞に落ち込み、その悲劇を強迫的に反復するのである。もちろんヒットラーなどの加害者側に非があることは言うまでもないが、今は正義の問題を論じているのではなく、彼らの精神病理を論じているわけである。

こうしてユダヤ人は外部者に対する憎悪と恐れを抑圧すると共に、それらを外部者に投影して、相手が自分に対して憎悪を抱き攻撃を加えるとするパラノイド傾向を強める。実際、現代でもユダヤ人について論じるだけで「反ユダヤ主義」のレッテルを貼られ、雑誌などが廃刊に追い込まれることがある。一部のユダヤ系人権団体は強い政治力と影響力を有しているが、それは彼らの内的な恐れの強さに正比例している。興味深い点はこのような精神病理はある種の伝染性があり、ある種の人々の間で共有される。そこではユダヤ人についての話題はシンパとアンチの間できわめて先鋭化した過敏な反応を生み出し、またある種のタブーが存在するに至る。

2.7. タブーの存在

原発性の真実を抑圧する結果、その抑圧が存在する間は真実を隠蔽し続けるために、様々のタブーが作られる。その真実と同種のもの、関わりのあるもの、連想させるも

[4] 一説にはヒットラー自身がユダヤ人の血を引いているとの説も一部に存在する。

の、これらはすべてアンタッチャブルとされ、論じることすらも禁止される。こうしてその社会は閉塞感を強めていく。周囲にとってはその閉鎖性により、彼らに対する疑心暗鬼を強めるという負のフィードバックに入る。歴史についても外に出せる真実と出せない真実を選択しつつ、表の「定番」となる「歴史」を作る。真実から逃れるための強迫反復傾向をもつ自我には必ずこのようなタブーと欺瞞が存在する。時にこのタブーは神話化され、現実から隔離されることがある。神話や言い伝えなどはこのように何かの不都合な真実を隠蔽、歪曲するための試みとして形成されることが多い。そしてその神話にまつわる儀式やしきたりが形成されていく。この儀式やしきたりを守っている限りは、超自我（良心）のなだめを得ることができ、原初的真実に直面するリスクを回避できるわけである。実際ユダヤ人の間には旧約聖書以外にも様々の伝説や逸話、さらに儀式やしきたりが存在する。

このようなある種の独善性と欺瞞性に対して、ユダヤ人の血統問題を論じる試みなどもなされてきた。例えば自身がアシュケナジ・ユダヤ人であり、ホロンの提唱者として有名なアーサー・ケストラー[7]による「第十三支族」説などである。これは現代のアシュケナジはアブラハムの血統的子孫ではなく、8-10 世紀ころ黒海近くにあったハザール帝国が、キリスト教であるビザンチン帝国とイスラム教であるウマイア朝に挟まれて、国難を脱するために国家規模で両者のルーツであるユダヤ教に改宗した結果、現在のユダヤ人はその子孫であって、アブラハムの血統的子孫ではないとする説である。これは大きな論争を引き起こした。

またいわゆるユダヤ人による陰謀説なども流行している。世界で起きるすべての事件は『シオンの議定書』に基づくユダヤ人の陰謀によるものであるとして、彼らが世界征服を狙っているとするわけである。実際、石油メジャー、穀物メジャー、情報機関などをユダヤ人資本が押さえていることは事実であるから、もっともらしく聞こえるわけである。これについても意見は見事に二分される。

しかしながら、ここで筆者が問題としたい点は、ケストラー説や陰謀説の正否ではなく、このような説が出る下地をある意味でユダヤ人自身が作っていることである。これがすなわちタブーの存在である。例えば「アシュケナジー＝ハザール人」説を論じるだけで、反ユダヤ主義のレッテルを張られてしまうことがおきる。しかるにこの種の論議を呼ぶ発言はもともとケストラーなどのユダヤ人（アシュケナジ）自身の中から出ている。ここにも彼らの自我分裂の兆候が見て取れる。この分裂した自我の真実から逃れるためにタブーが存在するが、このような過敏な反応自身が彼らの内部に何らかの抑圧された真実が存在することを証明している。これは彼らが原初的真実に直面し、それを認め、良心を適切に取り扱うときに初めて解放される。

３．日本人のアイデンティティと精神病理

3.1. アイデンティティの希薄さと分裂した自我

日本のアイデンティティの持ち方もペングリオンの立場と似ている。血統的なもの

と心理的なものが渾然一体となって、「自分は日本人である」という意識で十分とされていると思われる。そもそも古事記・日本書紀のような神話に基づく歴史が行われている以上、そのルーツを見出すことは困難である。そこでようやく天皇がアイデンティティの担保として機能し得る[5]。またその深層心理において、非常に深い自我の分裂を呈している。すなわち精神分析学者の岸田秀[8]も論じているように、自我に自ら目覚めることがなかった日本が、自閉症的鎖国の状態から半ば暴力的に開国を迫られ、その時点で、あくまでも自己完結的に太平の世を謳歌していたいという自我と、相手の恐喝に屈せざるを得なかった自我の間に分裂が生じた。岸田によると、日本はあたかもレイプされた女性のような存在であるという。しかもその相手が単に醜く野蛮な相手であれば、ただ相手を憎悪するという自分の自然の感情によって対応すれば良かったのであるが、逆にその相手はひじょうに美しく聡明で豊かな貴公子であり、自分を幸福にしてくれる存在のように見えたのである。

ここに日本という国を個人になぞらえた場合、自分の意志に反して開国させられて屈辱を覚えている本来の自我（内的自我）と、アメリカに対して、受容され保護されたいという欲求を抱き、さらに同一視によるプライドの再獲得といった取り繕いをせざるを得なくなった自我（外的自我）の間に分裂が生じたとする。レイプの被害者である女性が、その相手に保護されるために擦り寄らざるを得ない状況をイメージすれば、事態の把握が容易になる。ここで絶えず本来の内的自我の屈辱感を外的な自我が抑圧しつつ、相手に対して八方美人的対応をせざるを得なくなったのであるが、この抑圧された内的エネルギーは正当なチャネルを通して解消されない限り、自我の安定性に深刻な影響を及ぼす。外的自我は絶えずそのエネルギーの噴出を抑えなくてはならず、それは外的自我にとってかなりのエネルギーの消耗を意味し、時々に噴出したそのエネルギーを屈折した形で韓国や中国へ向け、その屈辱にまみれた内的自我を彼らに投影し、様々な悲劇を引き起こしたと説明される。ここで日本は常に「建前」と「本音」の乖離の上に自らを建てることを余儀なくされ、このような自己欺瞞によって、時々に噴出する内的エネルギーが、アメリカと日本の間で繰り返される同じパターン、すなわち強迫反復をもたらしているのである。

3.2. 4回去勢された国家

かくしてペリーの来航による開国はいわばそれまでの日本的政体の否定とも言え、「政治的去勢」と言える。その真実の感情を抑圧あるいは解離したまま、それまでの武士道に象徴される日本的価値観や美徳を全否定して欧米化と富国強兵に突き進んだ我が国は、世界有数の軍事国家としてかつての開国の屈辱で抑圧された内的自我の感情を暴発させる。日露戦争では極東の小国が白人帝国に勝利するという快挙を成し遂げ、抑圧された内的自我からのエネルギーの供給を受けつつ外的自我は増長し、ついには欧米列強に追い詰められてとはいえ、パー

[5] 思考実験としても天皇の欠如した「日本」はほとんど考えることはできないであろう。

ルハーバーに突っ込むという暴挙を犯す。これは開国により抑圧あるいは乖離された内的自我の感情の発露であったが、空母はそこにはなく、ミッドウェー海戦などの作戦の稚拙なミスも重ねて、ついに原爆を落とされる。ここで再びアメリカに無条件に屈せざるを得ない事態となり、いわば「軍事的去勢」を経験する。

戦後はそれまでの現人神天皇をいただいた軍国主義を全否定し、自由と民主主義、そして市場経済を金科玉条として経済大国の道をひた走り、ついに奇跡の復興からバブル経済に至り、「ジャパン・アズ・ナンバー１」と賞賛されるまでになる。ロックフェラービルを買収したり、天文学的値段の絵画を収集したりしたが、これも抑圧されている内的自我の感情の発露と言え、それは表の自我は増長し、経済により白人帝国主義、特にアメリカに復讐し得たようであるが、これもバブル崩壊で一挙に挫折する。ここで失われた国富は戦争による損害規模とも言われる[6]。事の真実はおいても、我が国の国富はアメリカへと移転したことは間違いなく、戦後の努力はまさに泡と消えた。これはいわば「経済的去勢」と言える。

かくしてその後のアイデンティティの担保と価値観やパラダイムを喪失したまま不良債権などのバブルの後始末に追われ、失われた 10 年は 20 年となり、30 年目に入っている。この間、新自由主義などの導入により社会は二分化し、貧困率も上昇、デフレ経済は国民を苦しめている。しかも将来も見えないままの中で、2011 年 3 月に東北沖大地震による原発のメルトダウンが起きた。原発が 3 基もメルトダウン、さらにはメルトスルーするという人類史上初めての事故であり、被爆国として表面上は非核三原則を標榜し、核に対しては強迫的なまでに世界でもっとも潔癖であった我が国が、惨めにも多量の放射性物質を撒き散らすという醜態を演じている。その量はすでにチェルノブイリを超えるとも言われる。これは日本の面子を著しく失なわしめるものであり、世界に対する発言力も損なわれることになる。すなわちこの件は、いわば「倫理的去勢」と言える。

以上のように日本は対米関係あるいは対世界関係において、各領域において 4 回の去勢を受け、いわばエディプス期において挫折しているゆえに、特に対米関係においては自立し得ないのである。その去勢の度ごとに、つねにそれまでの自身のアイデンティティの拠り所やパラダイムを全否定しつつ、次の価値観やパラダイムを盲目的に採用し、強迫的にそれに従って邁進することを繰り返してきた。この価値観の転換の素早さあるいは盲目性と、その振れ幅の大きさに我が国の病理を見て取れる。そして現在、対米従属の姿勢が声高に避難される中で、「日本を取り戻す」のスローガンに従って、憲法 9 条の改正を射程に入れて、右傾化が顕著になっている。その姿勢は中国と韓国を刺激し、今日の諸問題が噴出していることは周知のとおりである。これは抑圧あるいは解離されていた内的自我の感情エネルギーが噴出している状態と言える。

４．両者の類似性

[6]一部にはアメリカのユダヤ系金融による仕掛けがあったとも言われている。

4.1. 真実の抑圧による分裂した自我

ユダヤ人においても日本人においても歴史上度重なるトラウマを経験しつつも、それを巧妙に否定あるいは抑圧しつつ、表向きは経済や技術において多大なる成果を上げてきた。その基底には肛門期への固着による強迫性向（真面目・頑固・几帳面・拘り・ケチ・清潔好き・加虐性と被虐性など）が寄与している。しかしながら同時にある種の自己欺瞞をかかえ、そのため生じる分裂した自我構造を有する点において実に似ていると言える。ユダヤ人においては幾多の迫害を経ても、ユダヤ教を信奉しつつ、その預言の成就であるイエス・キリスト（実体）を拒み、その罪悪感を抑圧し、形式的儀式（影）だけを強迫反復的に繰り返し、一種の自閉的世界の中に閉じこもっている。日本人もアメリカによる長期対日政策によって 4 回の去勢を経つつ、唯一神信仰を取らないままにアニミズム的信仰段階にとどまり、やはり一種の形式に頑なにのっとり、自閉的空間で強迫反復的に繰り返している。この閉鎖空間での形式的強迫反復は霊的なヴァーチャル空間での行動であり、この点は両者の本質的共通要因と言える。その病理の原因は何らかの真実の抑圧あるいは隠蔽にある。原初的に何らかの真実からの逃避あるいは回避よって、その真実を抑圧するための取り繕いと言える。

日本人の場合、アメリカによって自己の意志に反して暴力的に開国を余儀なくされた事実がトラウマとしての原初体験になっているという説はすでに述べている。この論の提唱者である精神分析学者岸田秀[9]は、実はこの開国以前にもすでに何らかの真実を抑圧する場面があったであろうことを述べている。例えば大和朝廷が成立する以前にすでに新羅や任那の実質的植民地であったのではないかなどの見方である。ゆえに日本国家はその国家誕生の時点からすべて真実からの逃避の上に成り立っており、それを否定・抑圧することによる強迫反復の上に立つ、いわばフェイク（擬似物）であるとしている。これは古墳の内部がいまだに秘されていることからも伺える。そこには日本の国家としての、もっと言えば天皇制の根本的アイデンティティを根底から揺るがしかねない真実が隠蔽されている可能性がある。かくのごとく日本人の精神構造の深部にはユダヤ人のそれと同様に何かの真実が隠蔽されており、それに触れることはタブーなのである。

ユダヤ人においても、その血統的アイデンティティ（=アブラハムの子孫であること）における不明確性と、対する意識的アイデンティティにおける神の選民としての排他的尊大さ、また歴史上のトラウマ的事件による自我の分裂要因、そして自己完結的閉鎖性、尊大な自尊心と臆病さ、潔癖さやまじめさ、あるいは頑固さ・頑なさの形で表れる強迫傾向、外柔内剛的性質、儀式やしきたりに対するこだわり、さらにはローマに追い詰められた際のマサダの要塞における「生きて虜囚の辱めを受けず」に基づいた集団自決に現れる大和魂ならぬ「マサダ魂」などが見られる。これらの要因は両者にあってきわめて共通の要因である。

一方は砂漠の地において牧畜を中心としたキャラバン生活を送りつつ、神から律法を委ねられ、国を喪失しディアスポラにあって 2000 年近くにわたり数々の悲劇と試練を経て、高度の知性を持ちつつも、なおも

自身が待望するメシアを拒み続ける民、他方は緑豊かな自然に恵まれ、ぬくぬくと国土を侵略されたこともないままに唯一の人格神を採らず、森の精・山の精といったアニミズム的世界に埋没しつつ、見かけは科学技術立国して立ちも、その裏には呪術などが現在もはびこり、肉において現れた神イエス・キリストに無頓着かあるいは意図的に拒み続ける民。ちなみに「現人神天皇制」は明治時代に近代的な日本的立憲君主制を天皇制と矛盾なく確立するために、伊藤博文らによりキリスト信仰体系を参考に生み出されたものとされている[10)]。

ユダヤ人と日本人については、かのイザヤ・ベンダサン（山本七平と推定される）以来、マスコミでも注目を集め、繰り返し論じられている。最近新たにいわゆるアッシリヤによって失われた十部族のその後の運命について、日本に入っているとする「日ユ同祖論」が各方面で取り上げられている[11)]。いわく、日本古来の神道のしきたりや宮の構造、神輿の担ぎ方、装束などがユダヤ教のしきたりや神殿の構造、契約の箱の担ぎ方、装束とひじょうに似ていること、またラビ・トケイヤーなどのユダヤ人が日本に来たときに覚える親和感と安心感、日本人の顔にユダヤ人の面影を見出すこと、文字や言葉の中にヘブル語と共通する単語がたくさんあることなどを根拠とするが、証明されているわけではない。

また一説には天皇家の宝物殿にはヘブル語の神の聖名”ＹＨＷＨ”[7]がその裏に書かれた鏡があるという未確認情報もある。これらのことからアッシリヤに連れ去られた十部族はシルクロードを通って日本に辿り着いて、日本の基礎を作ったとしている。また秦氏などはユダヤ教から改宗したネストリウス派クリスチャンであり、古代日本文化の基礎を作ったなどの説も提出されている[12)]。

以上の事の成否については判断する根拠が十分でないので保留するが、大切な点はかくのごとく日本人のアイデンティティのルーツを神的権威に求める傾向は、今日個人レベルにおいてだけでなく、日本人としての「自分探し」の傾向が強まっていることの証左と言える。

4.2. メシア待望と天皇制

人は霊的次元から切り離された結果[8]、内側に本質的に霊的真空領域を抱えている。この空虚を何らかの形で埋める必要があり、様々のカルト（礼拝対象と様式）を発明してきた。これらがいわゆる宗教を形成するわけであるが、要するに何かを超越者を礼拝したいという強い欲求が満たされていないままに存在するゆえである。この礼拝欲求あるいは霊的真空を充足するための試みとして、宗教の形式をとらないまでも、自己流の"礼拝対象"を作り上げる。

例えば芸能界やスポーツ界のアイドルなどはその典型であり、大衆は自らの内側にある満たされない何らかの欲求をアイドルに投影し、自身とアイドルを同一視し、その

[7] これを神聖テトラグラマトンと呼ぶが、その発音は失われている。かつては母音を適当に割り当てて「ジェホヴァ」と読んでいたが、最近では「ヤハヴェ」とするのが正確とされている。

[8] WHO では健康の条件として、肉体的健康、社会的健康ばかりでなく、「霊的健康(spiritual health)」の概念を提示している。

言動・行動の中において代償的にその充足を得るわけである。コンサートやライブなどはある種の礼拝空間とも言える。かくしてアイドルに入れ込む人々の心理は、第三者にはまったく理解不能のものとなりうる。いわばアイドルとは真っ白なキャンパスのようなものであり、あまり自己主張することなく、大衆の埋もれた願望を自由に描き出せるものであればあるほど、いわゆる人気は高まる。ここに働いている精神病理は投影と同一視、そして代償満足である。

すでに述べたように、この投影によってパラノイドの心理に陥り、その閉鎖性と排他性を深めるわけであるが、このとき同時に純化あるいは美化の過程も進む。自ら投影した理想像をその閉鎖的空間の中で純化し、美化するわけである。これは例えばカトリックにおけるマリア礼拝にも通じる要因であり、男性が女性に求める処女性が極地まで純化・美化された形式と言える。要するに汚れていないこと、聖であること、これがアイドルの絶対的要件となる。

実は日本の天皇においてもこの精神病理が働いている。世界でもっとも古くかつ一貫している王室あるいは皇室と言われる Y 遺伝子系の天皇制のあり方は、世界でも類を見ない。その権威の根拠づけのためにわが国最初の正史『日本書紀』が編まれたが、二千数百年にわたりそれは継続している。天皇制の成立機序を精神病理的にみると次のように考えられるだろう。日本の天皇家はイギリス王室に比べればスキャンダルはなく、その純潔さはきわめて高いと言える。人格的にも高潔な人々であることは認める。しかも皇室は閉鎖空間であり、われわれの日常性から切り離され、大衆の内的欲求をすべて投影するキャンバスになっている。つまり理想的アイドルの条件を満たしている。しかもアイドルたる条件をほぼ 100%満たしていると言える。元来天皇は神と民の間を取り持つ祭司であるが、現人神に祭り上げられるだけの現実的資質も有していた。皇室においては、神道との関わりにおいて霊的要因としてアニミズムの傾向が強く働いている。アニミズム的神聖さを形と様式として表現する媒体として天皇制は理想的である。かくして以上のような精神病理と霊的要因が複雑に錯綜して日本のアイデンティティを定義づけ支持する縁として強固な霊的精神的構造体となっている。

4.3. 閉鎖性と純化の過程

かくして天皇は霊的真空を代償的に満たす機能を果たすと同時に、かつて土居健郎[13]が指摘した日本人の精神病理である甘えを投影し、それを代償的にかつ自閉的空間で満たす対象としても機能している。大衆が皇室に対して寄せる気持ちは、多分に充足されていない甘えを満たしてくれるであろうと言う期待感に支えられている。しかも皇室は大衆との実際的接触はないから、大衆が投影した甘えは決して裏切られることはない。

そして実はこれは皇室ばかりでなく、一般社会においても何でも受け入れ、許し、支え、励ましてくれる人物、しかもあまり自己の意見とか他人にうるさく言うことはない人物、このような人物が団体のシンボル的存在として求められる。実際このような人物をいただいた団体ではその人物のアイドル性が究極まで純化・美化される。ただし俗世ではこのアイドルがしばしばぼろを出す

ことがあり、その時点でその団体は終わる。

このようにしてアイドルは神聖にして犯すべからずの境地にまで高められ、ついには礼拝対象とすらなり得る。要するに日本人のアニミズム志向と甘えの精神病理が絡んで、いわゆる天皇制が成立するわけである。このメカニズムはユダヤ人における「メシア待望願望」と共通する要因である。ユダヤ人は迫害の中でその苦難が大きければ大きいほど、充足されていない内的願望を投影し、自分を解放してくれるであろう「メシア」をアイドル化し、純化し、美化する。あのみすぼらしく十字架で処刑された歴史的ナザレのイエスはその像からあまりにもかけ離れた存在だったのである。

５．ユダヤ人と日本人の相違性：単極性と双極性

以上のようにユダヤ人と日本人は、引き裂かれた自我の病理を共有している。しかしここに両者の相違も見られる。すなわちユダヤ人の場合は単極性であり、日本人は双極性と言える。前者は自己欺瞞をひたすら覆い隠し続ける努力によって、偽りの自我肥大を呈し、パラノイド状態を呈している。彼らにはそのアイデンティティを担保する中核的存在として YHWH（彼らの神の固有名詞）と明文化された旧約聖書（トーラー、ナーヴィーなど）がある。それが神の選民としての保証を与え、よってアメリカおよび周辺国との関係も自らの基準に則って一貫している。一方、後者にはアイデンティティの担保する存在としては古事記・日本書紀などのきわめて曖昧なものしか存在しない。目に見える存在としては天皇があるが、実質的な権力は有していない。そこで糸の切れたタコのように不安定な状態を呈する。すなわち引き裂かれた内的自我と外的自我の相克が入れ替わりに現れ、あたかも躁と欝を繰り返す患者のように、ある時はべったりの対米従属姿勢を、ある時は反米的右翼的色彩が強まると言う周期的な波を経験している。現在、政治状況は既に述べた内的自我の抑圧あるいは解離が解けつつあり、対米従属から自立すべく右傾化の兆候を見せている。

以上がユダヤ人と日本人の相違性である。かくして中東情勢においては孤立感を覚えるイスラエルの対外姿勢はますます頑なものとなり、周辺イスラム国との摩擦も強まる。彼らの病理が単極性である故である。彼らは自己のアイデンティティと国の存立が脅かされるときには単独でも行動するであろう。対する去勢された国家日本ではこれまで揺れていた二極の間の変動が大きくなり、最近の大阪知事橋下氏と在特会の桜井氏の口論に象徴されるように世論も感情的に割れ、建設的な意見交流はできず、ただ混乱と混迷を深める。つねに自分の中で分裂した自我が蠢くためである。これは理性を超えて無意識レベルでの反応を生み出す。日本はいずれこの外的自我と内的自我の葛藤がきわめて短期の間に、大きな振幅で繰り返され、いずれ疲弊して分裂病末期のような自閉性と感情鈍磨の陰性症状に陥るものと推測される。事実、人口減少や若者の生命力低下などにその兆候を見ることができる。

６．混迷の時代のしるし：ナショナリズムとポピュリズム

6.1.アイドルあるいは「メシア」の待望

今日いよいよ混迷の度合いを増している中東情勢やアメリカとイラクの関係、さらに北朝鮮との関係など、ますます目先が見えなくなってきている。最近のオバマ政権はこれまでのアメリカの対イスラエル姿勢を否定する方向にあり、イスラエルはますます孤立へと追い込まれている。わが国も教育基本法においても「愛国心」や「忠誠心」に関する条項を盛り込み、いよいよ憲法改正も射程に入るなどのきな臭い風も吹くようになっている。世界的に見ても政治経済の状況が混迷を深める時代には必ずこのようなナショナリズムが台頭し、自分たちは特別の存在であると主張する人々が出るものである。政治においても、ある種のヒーロー的な人々がもてそやされ、人々はそれらのヒーローの周りに集まるようになる。いずれファシズムへとつながる。かくしてヒトラーが登場した時代背景も同様の雰囲気であった。彼は当初アウトバーンの建設などで経済を活性化し、第一次大戦の賠償で疲弊したドイツの「救世主（メシア）」として登場したのだった。

このようなアイドルあるいはメシア待望の空気が醸成される根本原因としては、自らのアイデンティティの根拠を目に見える形で担保したいと言う無意識的欲求によるものである。先が見えない、何を頼ってよいか分からない、自らのアイデンティティの根拠が希薄である、などの精神的な不安定さがその根底にある。このような時に、自分は神に選ばれた血統にある民族であり、また一見頼りとなりそうなヒーローの語る神話化された成功物語や処世術などを当てにする心理機制である。つまり民族主義とポピュリズムの根底には、希薄にして脆弱な充分に確立されていないアイデンティティの問題が本質的に存在する。

かくしてこの脆弱なアイデンティティを補償するために諸々の神話や英雄譚を作り上げ、その上で自我を拡大することを必要とする。ヒトラーや毛沢東、さらには金成日などには必ず美談や神話がついてまわる。しかしこのような内実を伴なわいまま肥大化した自我はきわめて脆弱であり、見かけは尊大な主張と振る舞いに満ちているが、内的には臆病さと傷つき易さが特徴である。これが病的になると、自分のうちにある敵意などを相手に投影して、相手が自分に敵意をいだいていると錯覚し、被害妄想などを呈するパラノイドに陥える。現在われわれが見ているイスラエルもパレスチナの相克もこのパラノイドを互いに増幅し合っているわけである。自分のうちにある敵意や憎悪が強ければ強いほど、相手からの攻撃を恐れるようになる。つまり彼らは互いに鏡に映った自分を見ているわけである。これが現在の中東問題の精神病理的なメカニズムである。

6.2.アイデンティティを担保するもの

ここに先に述べたナショナリズムに走る精神病理が存在する。つまり日本人にとっては天皇をいただく国体が、ユダヤ人にとって排他的選民思想は彼らの脆弱なアイデンティティを担保する唯一の縁なのである。これは一種の幻想の共有体であり、よってあくまでも頑なにそれを守り、その上に自

らを建てようとする。周りにはそれは彼らが自ら孤立化していると写る。こうして外部者に対して、日本の場合は天皇制選民国家的印象を、ユダヤ人の場合は排他的選民国家意識に由来する反ユダヤ的印象を~~受け~~植え付ける。特に、先に述べたようにユダヤ人は神の言葉を預かり、救い主を世にもたらすために選びを得ているにもかかわらず、その当のメシアを否定し拒絶するという自己のアイデンティティに反する行為を行った。ここで彼らの良心は真にその過ちを認めるか、あくまでも自己の正当性を主張し続けるかの選択が迫られるわけである。この意味で彼らは引き裂かれた民、あるいは自己矛盾した民なのである。

この彼ら自身の中における解消されていない葛藤が、あの地の問題を複雑化し、悲惨にしている。このような自己の中にある欺瞞を抱えたままに同じ悲劇を繰り返す精神病理を強迫反復と呼ぶ。ユダヤ人は真に自らの頑なさと過ちを認め、まことのメシアに立ち返るまではその悲劇を反復するであろう。かくしてアイデンティティが引き裂かれた民ーこれが現代のユダヤ人の本質である。これは日本と周辺諸国との関係についても言えることである。ゆえに両者ともそのアイデンティティを担保する共同幻想を頑なに保持しようとし、それが問題をさらに深めてしまう。筆者は現在のあの地の問題を政治社会あるいは歴史的観点だけでは決して本質は見えてこないと考えている。精神病理まで立ち至って初めて問題の本質見えると考える。なぜなら政治社会も歴史も人の心が生み出すものであるからである。この意味で筆者の立場は精神病理的史観と言える。

７．結語

以上、日本人とユダヤ人の自我構造の類似性と相違について述べてきた。大陸の両端に位置するふたつの民族あるいは共同体であるが、分裂した自我構造と、真実の抑圧による欺瞞と強迫反復的トラウマの経験、アイデンティティを担保するためのアイドルとしての天皇あるいはメシアの待望などの類似の病理を抱える。しかしその葛藤の表出の様式の相違として、単極性と双極性に分かれることを指摘した。

これらの要因はもちろん他の国家においても同様に見られるものであり、例えばロシアにおけるプーチンなどはかつてのピョートル大帝の再来としての大衆の期待する役割を実に見事に演じ、多大なる支持を得ている。イランにもおいてもカリスマ性を帯びた宗教的霊的指導者ハメネイなどをいただき、イスラム教シーア派の拠点としての地位を確立し、実質的力を担保するために核開発も着実に進め、イスラエルを地上から抹殺すると公言している。アメリカの稚拙な中東への介入により、リビアやイラクは混乱を深め、ISIS によるイスラム帝国の確立運動は国家規模に拡大している。ここでも自身のアイデンティティをイスラム教スンニ派としてシャリーア法に置き、カリフ国家設立を目論んで、これまでのアルカイダなどとは比較にならないパワーをつけてきている。「アラブの春」なるものは西側の希望的幻想に過ぎない。中東におけるイスラエルをめぐる憎悪の応酬は、BC2000 年あたりのアブラハムの異母兄弟の相克に

まで立ち戻るべきことを指摘したが、それは近親憎悪と言え、骨肉の争いであり、しばしば理屈によらない感情的要素が問題を深くかつ複雑にしている。さらに民族や国家としてのアイデンティティの村立に関わるレベルに立ち至っているゆえに、妥協は許されずに先鋭化し、世界の大きな不安定要因となる。いずれの民族、国家にしろ、自身のアイデンティティが否定されることに対しては理屈を超えた抵抗を見せるものであり、これが民族主義あるいは国粋主義、そしてポピュリズムのルーツでもある。

今後の中東情勢では、特に引き裂かれた国家イスラエルの象徴である引き裂かれた都エルサレムに注目すべきであることを指摘する。この地の運命が中東の運命を決定する。現在、世界情勢は、臨界点に達しつつあると言え、最悪の場合戦争状態へと発展し、日本も関わらざるを得ないところに置かれることもあり得るであろう。最後に、日本とイスラエル、そして世界の平和を祈りつつ本稿を終わる。

参考文献

（１） N.McLeod: “Illustrations to the epitome of the ancient history of Japan”、国際日本文化研究センター（http://shinku.nichibun.ac.jp/gpub/book/g0445.html）2014 年 10 月 25 日閲覧（ノーマン・マクドレオ、久保有政訳（2010）:『[超図説] 日本固有文明の謎はユダヤで解ける』、徳間書店にも収録）

（２） Jon Entine(2007): “ Abraham's Children: Race, Identity, and the DNA of the Chosen People”, Ground Central Publinshing,
（http://books.google.co.jp/books?id=_uO2jMwZVyk）2014 年 10 月 25 日閲覧

（３）Wikipedia,”ハプログループ D2（Y 染色体)”、（http://ja.wikipedia.org/wiki/ハプログループ D2_(Y 染色体)2014 年 10 月 25 日閲覧）

（４）イザヤ・ベン・ダサン（1971）:『日本人とユダヤ人』、角川文庫

（５）M・トケイヤー、箱崎総一訳（1975）:『ユダヤと日本　謎の古代史』、産能大学出版部

（６）ジークムント・フロイト、渡辺哲夫訳（2003）:『モーセと一神教』、ちくま学芸文庫

（７）アーサー・ケストラー、宇野正美訳（1990）:『ユダヤ人とは誰か―第十三支族・カザール王国の謎』、三交社

（８）岸田秀（1996）:『ものぐさ精神分析』、中公文庫

（９）岸田秀（1997）:『官僚病の起源』、新書館

（10）伊藤博文：『憲法原案起草の演説』（明治21年6月18日）（『衆憲史第27号、明治憲法と日本国憲法に関する基礎的資料（明治憲法の制定過程について） 最高法規としての憲法のあり方に関する調査小委員会（平成15 年5 月8 日の参考資料）』）

（11）ラビ・マーヴィン・トケイヤー、久保有政訳（1999）:『聖書に隠された日本・ユダヤ封印の古代史―失われた 10 部族の謎』、徳間書店

（12）ケン・ジョセフ・シニア＆ジュニア（2000）:『隠された十字架の国・日本－逆説の古代史』、徳間書店

（13）土居健郎（1971）:『甘えの構造』、弘文堂